

〔個人研究〕

中納言阿闍梨増俊について

増 山 賢 俊

一．はじめに

筆者はこれまで拙稿において勸修寺大法房実任（一〇九七～一一六九）を取り上げ、法を授けた師について調査を行なってきた^①。実任には六人の師が確認できたが、本稿では、その師のうち小野六流の一つとして知られる随心院流の祖とされる中納言阿闍梨増俊（一〇八四～一一六五または一一六八）の事績について取り上げる。

増俊の伝記については既に柴田賢龍氏の研究^②があるが、原資料によればいささか疑問な点も見られるので改めて検討してみたい。

二．増俊の出自について

増俊は勸修寺大僧都嚴覚（一〇五六～一一二二）より付法を受け、その後小野曼茶羅寺の五世となつて随心院流の流祖となつた人物であるが、その資料は多いとは言えない。柴田氏は『血脈類集記』と築島裕氏が翻刻された醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』の記事によつて源国俊（～一〇九九）の子とされる。

『血脈類集記』の厳覚付法を列する記事には⁽³⁾

朝嚴

増俊「中納言阿闍梨。堀川中納言國俊卿息／師主。六十 受者。三十」

永久三年「乙／未」 五月二十五日「昴宿／土曜」勸修寺勝福院に於いて之を授く（後略）。

*引用の中、割書きは「¹」朱書は『²』傍注は注記箇所横に⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ によって示した。またへは『續喜宗主書』校訂者による校異【¹】は『續喜宗主書』校訂者による補入、へは『究竟僧綱正』における追筆、へは醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』における割注・傍注・行取りは改めた。以後の引用文も同様

とある。醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』⁽⁴⁾の勸修寺流の記事の裏書に厳覚付法の記事が見られ、その中に記される増俊の名前の注記では、「中納言阿闍梨 堀川中納言國俊」⁽⁵⁾とあり、その脇に朱注で「永久三―五―廿五―甲午同院 六口」とある。この「同院」についてはその前の安祥寺律師宗意（一〇七四―一一四八）の灌頂受法場所が勸修寺とあることから、それに並んで記される増俊の場合も勸修寺と考えられる。

また、これらに見られる「堀川中納言國俊（卿）」という人物が、『公卿補任』に見出す事が出来ないことにより、柴田氏は『尊卑分脈』⁽⁶⁾の醍醐源氏の系図から、権大納言隆国（一〇〇四―一〇七七）の息の大納言俊明（一〇四四―一一一四）と国俊の箇所を挙げて

醍醐源氏の条によれば、大納言隆国（定賢法務の父親）の子大納言俊明（一〇四四―一一一四）の子に増俊がいて、俊明の兄弟に国俊が見えるのである。

と述べられている。また柴田氏はその『尊卑分脈』の頭注についても「中將從三位、恐らく誤り有り、『本朝』世紀」は從五位上に作る」とあることを指摘されている。その上で、増俊が「中納言阿闍梨」と呼ば

れる理由と出自について、「増俊は国俊の子であったが叔父俊明の猶子になったと推測するのは十分に可能である」として、その理由を『公卿補任』の俊明の事績に求め

俊明は永保二（一〇八二）年正月に権中納言、永長二（一〇九七）年（承徳元年）十二月に権大納言に任じているから、増俊が出家得度した時に中納言と称された事と何とか符号するのである。

と述べられている。加えて、『尊卑分脈』の系図から、弟に民部卿僧都静観（灌）（一〇八五～一一五七）、叔父に醍醐法務定賢（一一〇二～一一〇〇）・鳥羽僧正覚猷（一一〇五～一一四〇）がいることも指摘されている。

また柴田氏によれば、増俊の生まれは永保四／応徳元（一一〇八四）年または応徳三（一一〇八六）年とされる。このため、俊明の官職名で「中納言阿闍梨」と呼ばれたとするならば、俊明が権中納言に補任された永長二年に増俊は十二歳か十四歳となる。十二～十四歳の年齢で出家したとするならば、柴田氏の主張されるように出家時の官職名で呼ばれることになるだろう。

さて、『尊卑分脈』で増俊の父とされる源俊明は醍醐源氏源高明（九一四～九八二）の流れの中にあり、醍醐天皇（八八五～九三〇）―高明―俊賢（九五九または九六〇～一〇二七）―隆国―俊明と続く。そして、『尊卑分脈』では俊明の右に「右衛門督 使別當 治部卿 左衛門督 按察使 大納言 正二 民部卿 大宮大夫」とある。『殿暦』康和三年十月十日条には、「權大納言民部卿源朝臣俊明」と見られ、『公卿補任』の記事から以下のような経歴が知られる。永承八／天喜元（一〇五三）年に従五位下となる。康平四（一〇六一）年に加賀守、延久六／承保元（一〇七四）年左近衛中将・藏人頭、承保二（一〇七五）年六月十三日に正四位下で参議に補任、承保三（一〇七六）年に従三位、さらに承保四／承暦元（一〇七七）年に正三位、従二位となり、永保二（一〇八二）年に権中納言、永長二／承徳元（一〇九七）年に権大納言、

康和二（一一〇〇）年に大納言まで至った人物である。

一方で、血脈類に増俊の父とされる国俊は、隆国の子で俊明の弟にあたる。『尊卑分脈』の国俊の右の注記には「中將從三位」と記されるが、頭注にて「從五位上」の誤記と指摘している。『本朝世紀』康和元年三月十八日条にある国俊卒伝によれば、右衛門佐、民部権大輔、備後介、参河守、陸奥守等を歴任しているのみであり、参議にも昇っていない。増俊が国俊の子であるならば中納言阿闍梨と称されることはふさわしくない。ただ『尊卑分脈』では国俊の子として仁和寺僧「俊増」という名が見られる。しかし、血脈類等にはこの名は出てこない。このことは『尊卑分脈』が増俊を間違えて仁和寺僧「俊増」と記した可能性が考えられる。また俊増と増俊それぞれ別の人物がおり、血脈類がその二人の名を間違えその父を誤って記録した可能性も考えられなくはない。ただし、『尊卑分脈』が単純に俊増と増俊の名前を前後間違えて二重に記した可能性もある。ただその場合二人の増俊をどのように考えるかはまた別の問題である。

柴田氏が挙げられた資料以外にも、俊明を指し示す「堀川中納言」という称号と、国俊の名前が繋がられて記された記事は、『伝燈広録』（『続真言宗全書』所収）、『血脈類集記』（『増俊付法』（『真言宗全書』所収）、東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』三本（湯浅吉美氏翻刻、『成田山仏教研究所紀要』二九号）三一号所収）、随心院所藏聖教の中「随心院流系図」（第五二函三六号）（米田真理子氏紹介、『小野随心院所藏の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』所収）、『諸門跡譜』（『随心院』、『群書類従』所収）、「小野曼荼羅寺」随心院門跡次第」（『仁海僧正九百五十年御遠忌記念 随心院聖教類の研究』所収）、「随心院代々正嫡血脈」・「小野曼荼羅寺 随心院門跡」一・「小野曼荼羅寺 随心院門跡」二（以上三本は中山一麿氏の研究に基づく。『小野随心院所藏の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』所収）、玉島實雅著『随心院史略』第十二章「本尊、殿堂、書院の現在」歴代法統略譜」第二

節「隨心院歷代法統略譜」（玉島氏作成の隨心院の歷代法統略譜の部分は以下、「隨心院歷代法統略譜」と省略する）に見られる。次節で扱う生没年にも違いが見られるため、以下に列挙する。

・『伝燈広録』⁽¹⁰⁾

城州小野隨心院の開祖増俊の傳

十九の祖増俊。中納言の闍梨と曰ふ。京兆の人、太常卿國俊の子なり。童眞にして出家す。四度の法業訖つて傳法の戒壇に登り灌頂の職位を受け嚴覺の燈光を嗣ぐ。禮し去て一方の幢を樹て隨心院流と號す。即ち曼荼羅寺の一院なり。中古法盛りにして亦た德光あり。所以に次序で小野勸修寺・隨心・安と曰ふ。

（中略）

付法一人 顯嚴「隨心／院」

・『血脈類集記』「増俊付法」⁽¹¹⁾

《傳勸》 十二代。嚴學弟子

大法師増俊 「付法一人。隨心院と號す。長寛三年二月十一日／示寂」

裏書 増俊の事

堀川中納言國俊息。嚴覺大僧都灌頂の資。阿闍梨

顯嚴 「權律師。大輔。左大辨宰相顯業猶子。實は助教中原／廣忠息。壽永二年八月十四日入滅。八

十八」

仁平四年正月十九日印信を與ふ。師主「七十二」受者「三十九」

・東寺觀智院金剛藏『真言付法血脈圖』「嚴覺付法の弟子」⁽¹²⁾

増俊「随心院 朝嚴と同日に之を授く／阿闍梨」——顯嚴「僧都」

湯浅氏によれば、東寺觀智院金剛藏『真言付法血脈圖』には氏が翻刻をされた二五〇箱三⁽¹³⁾号のほかに一八箱四⁽¹⁴⁾号（別本）・二九〇箱六⁽¹⁵⁾号（又別本）があり、湯浅氏はこれらの校合の結果を報告されている。それによれば二九〇箱六号の又別本には該当箇所⁽¹⁶⁾に「はじめ『阿闍梨』と朱書し、「中納言アサリ堀川中納言國俊息」と重書」の注記があるとされる。

・「随心院流系図」（影印版⁽¹⁷⁾）

⑧ 中納言阿闍梨

増俊「堀川中納言／國俊息」

⑨ 文久二年五月廿五日勝福院に於いて傳授、受者三十一、色衆六人、仁安三年二月九日、入滅八十五

・『諸門跡譜』「随心院」⁽¹⁸⁾

増俊阿闍梨。「随心院／初祖」 中納言國俊卿男。嚴覺僧都資。

・「小野曼荼羅寺」随心院門跡次第⁽¹⁹⁾（影印版）

阿闍梨増俊「中納言國俊子」

・「随心院代々正嫡血脈」⁽²⁰⁾

⑩ 随心院初祖

増俊阿闍梨「仁安三年戊子二月九日入滅／中納言國俊卿男 嚴覺僧都資／永久十年五月廿五日」⁽²¹⁾

・「小野曼荼羅寺 随心院門跡」⁽²¹⁾

⑪ 『随流始祖』

阿闍梨増俊「堀川中納言國俊子、随心院流元祖／永久二年五月廿五日勸修寺勝福院に於いて傳授／

受者卅二人、色衆六口、仁安三年二月九日寂」

・「小野曼茶羅寺 隨心院門跡」二一（影印版）⁽²³⁾

阿闍梨増俊「仁安三年二月九日化／隨心院流元祖」

《9》『永久二年五月廿五日勸修寺勝福院に於いて傳授 受者卅二人、色衆六口』（朱書力）

《10》中納言國俊子》

・「隨心院歴代法統略譜」⁽²⁴⁾

《11》隨心院初祖》

増俊阿闍梨 吉田中納言國俊卿息 嚴覺大僧正資

永久三年五月廿五日 勸修寺勝福院に於いて嚴覺に就き傳法灌頂職位を受く、法幢を樹て

隨心院流と號す。

仁安三年二月九日 示寂八十二

まず『伝燈広録』においては、京都の太常卿国俊の子で童子にして出家したとされ、隨心院流の流祖となつたとある。「太常卿國俊」とあるが、国俊は太常卿（神祇伯・治部卿・式部卿の唐名）に昇つておらず、俊明が治部卿に補任されているため、この記事も国俊と俊明を混同したのであろう。それ以外にも国俊息としながら国俊の位階等について混乱のある記事は、『血脈類集記』『増俊付法』・東寺觀智院金剛藏『真言付法血脈図』別本・「隨心院流系図」・『諸門跡譜』『隨心院』・「小野曼茶羅寺」隨心院門跡次第・「隨心院代々正嫡血脈」・「小野曼茶羅寺 隨心院門跡」一・「小野曼茶羅寺 隨心院門跡」二に見られる。これらの記事は共通して「中納言国俊」あるいは「堀川中納言国俊」の息として記録される。

さて、「隨心院流系図」の増俊の名の右の注記に「文久二年五月廿五日」とあるが、「文久」は江戸末の

元号であるので「永久」の間違いであろう。

最後に挙げた玉島氏作成の「随心院歴代法統略譜」に「吉田中納言國俊卿息」と記されるが、何を根拠に記したかは不明である。『尊卑分脈』⁽²⁴⁾によれば藤原氏高藤流の中に吉田家があり、そこに吉田国俊（一三〇八または一三一〇〜一三五八）の名が見られる。右に「右京大夫權中納言」とあり、時代が全く異なっているが同じ国俊の名で、權中納言まで昇っていることから混同されたのであろう。

増俊の称号としての「堀川中納言」については、「堀川」については不明であるが、この頃皇宮として使われていた高陽院が堀川東にあり、また俊明は「大皇太后宮大夫」となっている。おそらく俊明は「大皇太后宮大夫」として高陽院にあつて皇宮に直接通つていたことが考えられる。そういったところから、俊明を「堀川中納言」と称した可能性が考えられる。『公卿補任』⁽²⁵⁾よりこの当時中納言で皇后宮大夫になった人物として藤原祐家（一〇三六〜一〇八八）等がいるが、国俊はこのような立場になっていない。よつて「從三位」「堀川」「中納言」といった増俊を指す呼称は、国俊ではなく俊明にふさわしい。

ところで増俊の名に続いて「中納言阿闍梨」という記載のみで国俊息と記載のない資料として、『真言烈祖表白集』⁽²⁶⁾・湯浅氏が翻刻された東寺觀智院金剛藏『小野方血脈抄』⁽²⁷⁾（杲宝撰）・『血脈鈔』⁽²⁸⁾（野）（『小野方血脈抄』の別本）・『諸流灌頂秘藏鈔』⁽²⁹⁾「小野三流血脈并高野中院流血脈」・『秘密儀軌隨聞記』⁽³⁰⁾・『野沢血脈集』⁽³¹⁾があるが、どれもごく簡略な記事になっているために、必ずしも国俊息ではないという伝承を伝える記事とは言い切れない。

以上から、『血脈類集記』その他において、なぜ俊明息ではなく国俊息としたのか、あるいは俊明を指し示す「從三位」「堀川」「中納言」という呼称を増俊に与えたのか不明である。「国俊息」という伝承と「從三位」「堀川」「中納言」という呼称の伝承について、もし両方の伝承共に正しいとするならば、柴田氏の

言われるように、国俊の息として生れたが早くして俊明の猶子となつたために、このように呼ばれることになつたと考えることができよう。

しかし、筆者は「中納言阿闍梨」と「堀川中納言国俊」の二つのキーワードに着目した。増俊が「中納言阿闍梨」と呼ばれていたことは間違いない。一方で「堀川中納言」と「国俊」は結びつかない。結びつかない「堀川中納言」と「国俊」を結びつけた「堀川中納言国俊の息」という伝承よりも、中納言となつていた俊明の息と考えるほうがより蓋然性は高いであろう。

柴田氏の言われるような増俊を俊明の猶子とする資料も全く見られず、俊明の息であつた可能性が考えられる。柴田氏の言われる国俊息として生れ、俊明の猶子になつた説の根拠は「堀川中納言国俊卿息」という記事であるが、これ自体をどこまで重視できるか疑問が残る。それよりは単純に中納言に昇っている俊明の息として見るので良いのではないか。

三、生没年にについて

増俊の生年について柴田氏は「厳覚より伝法灌頂を受ける事」の中で

猶お増俊の生年について密大辞「増俊」の項には「長寛三（一一六五）年二月十一日寂す。寿八十二」と云い、是によれば永保四（一一〇八）年（応徳元年）の生れになるが、右『類集記』（注三参照）は受者増俊の年令を三十とするから応徳三（一一〇八）年の誕生となる。

とされている。「入滅と付法の事」の記事でも『血脈類集記』「増俊」付法を挙げられている。そこには付法の弟子に大輔阿闍梨顕嚴（一一一六～一一八三）の名が見られ、増俊が顕嚴に法を授けた日が仁平四年正月十九日で、この時増俊七十一歳、顕嚴三十九歳とされる。よつて、増俊の生まれは永保四／応徳元（一

○八四）年になるが、これは『密教大辞典』の説と同じである。このように柴田氏は、『血脈類集記』に見られる永保四／応徳元（一〇八四）年説と応徳三（一〇八六）年説の両論併記されている。

また、柴田氏が指摘されていないが、応徳元（一〇八四）年誕生説を伝える資料が随心院聖教に見られる。没年に違いが見られるので以下に資料を挙げていきたい。

「随心院流系図」では、嚴寛付法の弟子として増俊の名が見られ、増俊の名の左側に「文久二年五月廿五日勝福院に於いて傳授 受者三十二、色衆六人 仁安三年二月九日 入滅八十五」とある。この記事によれば永保四／応徳元（一〇八四）年に生まれ、仁安三（一一六八）年二月九日に没したことになる。「随心院流系図」を紹介された米田氏によれば、おそらく金剛王院大僧正静嚴（一二四三または一二四五～一二九九）あたりまでと推測される「旧記」を元に新たにその後の記録を補って成立したものとされ、その時期は奥書より永徳四／至徳元（一三八四）年と推測されている。その「旧記」と呼ばれる資料も増俊滅後に成立したものであり、同時代資料とは言えず、『血脈類集記』と比べても特別信憑性が高いとはいえないであろう。それ以外の「随心院代々正嫡血脈」、「小野曼荼羅寺 随心院門跡」一、「小野曼荼羅寺 随心院門跡」二でも同じく没年が仁安三（一一六八）年二月九日となっている。

また、玉島氏の「随心院歴代法統略譜」によれば、仁安三（一一六八）年二月九日に八十二歳で入滅していることから、生まれは応徳四／寛治元（一〇八七）年となる。しかし、典拠が不明なためあまり信頼にたるとは言い難い。おそらく、他の随心院聖教が記す仁安三（一一六八）年没説に『血脈類集記』の増俊付法記事から推定される生年を組み合わせたものだろう。そのため、「随心院歴代法統略譜」を生没年の典拠とすることは難しいだろう。

さて、これまで挙げた資料からそれぞれ推測できる増俊の生没年、没日、没年時の年齢を列挙する。

- ・『血脈類集記』「嚴覺付法」 応徳三（二〇八六）年
- ・『血脈類集記』「増俊付法」 永保四／応徳元（二〇八四）年

（長寛三／永萬元（一一六五）年二月十一日入滅 八十二歳

- ・「随心院流系図」 永保四／応徳元（二〇八四）年

- ・「随心院代々正嫡血脈」 仁安三（一一六八）年二月九日入滅 八十五歳

- ・「小野曼茶羅寺 随心院門跡」一 仁安三（一一六八）年二月九日入滅

- ・「小野曼茶羅寺 随心院門跡」二 仁安三（一一六八）年二月九日入滅

- ・「随心院歴代法統略譜」 応徳四／寛治元（二〇八七）年

- ・「真言烈祖表白集」 仁安三（一一六八）年二月九日入滅 八十二歳

これらの資料から、生年・没年・没日・年齢について検討していく。

生年については、まず『血脈類集記』に二説ある。「増俊付法」の記事の永保四／応徳元（二〇八四）年

説と「嚴覺付法」の記事の応徳三（二〇八六）年説である。「随心院聖教文書」の「随心院流系図」も同じく永保四／応徳元（二〇八四）年説を取っている。また、『血脈類集記』と「随心院聖教文書」で嚴覺からの受法の年次が「永久三年」と「永久二年」と違いが見られるが、「二」と「三」は書写過程で間違いやすい数字であり、『血脈類集記』もそれほど正確とは言えないため、どちらの記述が正しいか断定できない。そのため、『血脈類集記』「嚴覺付法」に見られる「受者 三十」という記事も三十歳前後ということであって、実年齢も三十歳でない可能性も考えられる。そのことからすれば、応徳三（二〇八六）年説は灌頂時の年齢換算から出てくるもので、その年齢自体が確実なものとは言えない以上、生年を特定できる根拠にはならないであろう。

そのため、同じ『血脈類集記』でも没年から換算される永保四／応徳元（一〇八四）年生れの説の可能性があるように思われる。また、玉島氏の「随心院歴代法統略譜」は典拠不明の為、他の資料と比較し信頼性に劣るであろう。したがって、生年としては永保四／応徳元（一〇八四）年の可能性が高いと考える。

没年・没日・入滅時の年齢については、『血脈類集記』「増俊付法」の記事より長寛三／永萬元（一一六五）年二月十一日、八十二歳で入滅とあり、「随心院聖教文書」では「随心院流系図」に仁安三（一一六八）年二月九日に八十五歳で入滅とあり、他の「随心院聖教文書」も「随心院流系図」と同じく仁安三（一一六八）年二月九日入滅となっている。上島享氏は、仁安三（一一六八）年二月九日とされているが、おそらく「随心院歴代法統略譜」や「随心院流系図」に基づくものであろう。「随心院流系図」の記事を完全に信頼できる根拠はないため、仁安三（一一六八）年二月九日と特定は出来ないであろう。「随心院代々正嫡血脈」、「小野曼茶羅寺 随心院門跡」一、「小野曼茶羅寺 随心院門跡」二は、中山氏⁽³⁴⁾によれば近世初頭に作られたものとされるが、近世のものだからと言って「随心院聖教文書」の説を否定する根拠は他にない。寺内の何らかの古い伝承を伝えている可能性はあり、どれか一つに決定するだけの根拠はどこにも認められない。増俊自身の事績そのものも不明であり、特に晩年に関する事績は全くわかっていない。したがって没年に関しては『血脈類集記』の長寛三／永萬元（一一六五）年と随心院聖教文書類に見られる仁安三（一一六八）年の二説ということになる。それにあわせて、増俊の享年も『血脈類集記』の八十二歳と随心院聖教文書類の八十五歳の両説となる。

没日について柴田氏は、先に挙げた『血脈類集記』の「増俊」付法より引用して、入滅日を二月十一日とされている。さらに『真言烈祖表白集』⁽³⁵⁾の「仲春（二月）第九日は小野中納言阿闍梨増俊遷化の日なり」と

を引用して、二月九日説もあることを指摘され、二説併記されている。

一方で、柴田氏が指摘されていない、随心院聖教文書類の「随心院流系図」・「随心院代々正嫡血脈」・「小野曼茶羅寺 随心院門跡」一・「小野曼茶羅寺 随心院門跡」二・「随心院歴代法統略譜」では、入滅日を二月九日とする。これは柴田氏の指摘された『真言烈祖表白集』と同じ日になる。このように没日に関しては二月九日と二月十一日の二説が伝えられるが、九日入滅、十一日荼毘日とする可能性も考えられよう。『真言烈祖表白集』の解題によれば、最後に唐橋大僧正親厳（一一五一～一二三六）の名が見られるため、成立の上限は親厳の没年以降であり、下限についてはわからないとされている。しかし、親厳の入滅後すぐの成立であるならば、『血脈類集記』よりも早いので、二月九日という没日の信憑性は高いのではないかと考えられる。

以上から、生没年については、

・永保四／応徳元（一〇八四）年誕生 長寛三／永万元（一一六五）年 入滅八十二歳
・永保四／応徳元（一〇八四）年誕生 仁安三（一一六八）年 入滅八十五歳
の両説が残るであろう。どちらが正しいか判断する材料がこれ以上ないので、今後の課題としたい。

四・東寺阿闍梨職補任について

柴田氏は「東寺定額僧なる事」の項で、東寺百合文書ふ函「後七日御修法修僧交名」³⁶に記されている「天仁三年後七日御修法修僧等交名事」に天仁三／天永元（一一一〇）年鳥羽僧正範俊（一〇三八～一一二二）が後七日御修法を修したとき、伴僧の一人に「増俊阿闍梨〔増益護摩〕と確認できるため、天仁三／天永元（一一一〇）年には阿闍梨職に補任されていたと指摘され、「同職は東寺定額僧が専任される灌頂院十六

口有識の中であつたらしい」とされている。その理由として『東寺長者補任』の安貞三／寛喜元（一二二九）年の条に、成就院大僧正寛助（一〇五七―一一二五）が天永四／永久元（一一一三）年十二月十七日に執り行つた灌頂において讃衆十人の一人として名が挙がっている。そこには「後朝讃増俊阿闍梨教授」とあることから

讃衆十人の僧名と配役を具さに記して「増俊阿闍梨教授」と云い（是は結縁灌頂で受者が多いから複数の教授がいる）、寛助と増俊との間に特別な関係も認められない故に増俊が東寺定額僧阿闍梨であつた事はほぼ間違いないであろう。

と述べられている。その理由として、「当時醍醐系の僧侶が補任される阿闍梨職としては東寺灌頂院の他に曼荼羅寺三口、上醍醐円光院三口もあつた」と指摘され、横内裕人氏が翻刻された高山寺旧蔵『究竟僧網任』の「東寺阿闍梨十六口」の条には⁽³⁸⁾

東寺阿闍梨十六口 仁明天王御願

《傳八口 廣澤僧正正暦五年奏置》

《傳八口 円堂僧正長承元年奏加》

《傳小》

増俊〔中納言〕

《傳醜》

尊雅〔太政大臣雅實息〕

《傳醜》

貞實〔肥後云々〕

《傳仁》

重助〔小納言云々〕

《傳仁》

實助〔小納言云々〕

《傳醜》

源運〔摂津云々／〔大僧都〕

《傳醒》

宗命〔内大臣宗能／息（僧都）〕

《傳亡》

俊暁〔大藏卿云々〕

《傳醒》

源基〔撰津云々〕

《傳亡》

賢海〔常教房〕

《傳亡》

定慶〔覺定房云々〕

《傳亡》

行仁〔寶積房云々〕

《傳亡》

信賢〔宰相云々／〔已灌頂〕〕

《傳醒》

祐海〔近江云々〕

《傳亡》

とあり、「《傳小》 増俊〔中納言〕」と記されていることから

小野曼荼羅寺増俊が東寺灌頂院阿闍梨であつたと知れ、同阿闍梨を辞して本寺系の阿闍梨に就くことはあつてもその逆はほとんど無いであろうから、増俊は半世紀以上の長きに亘つて東寺阿闍梨の職にあつたのである。

と述べられ、増俊が小野曼荼羅寺の阿闍梨を辞め東寺灌頂院阿闍梨になつたとされている。

ただ柴田氏の指摘は必ずしも納得できるものではなく、東寺定額僧について『東宝記』「廿一口定額僧を永宣旨阿闍梨に補任する事」⁽³⁹⁾には

（前略）右、謹みて舊記を案ずるに、弘法大師、去んじ弘仁十四年勅を給はり、東寺始めて眞言の道場と爲る。これより以降、前に五十僧申し置からる、後廿一口に改め定めらる。其の人なり。則ち兩部の大法を受け、四種の護摩を練行す。僧若し闕有らば、次第功業に随つて之を補せ、てへれば是れ

則ち當朝根本密教の始めなり。厥の後、天台山惣持院、東寺の例に因り准じて、十六人の阿闍梨を申し請はる。近代年來他宗の寺々、阿闍梨を申し置かること、已に七十餘人。爰に根本眞言受くるの砌、件の職位に預かる。其の員幾ばく非ず。そもも定額僧等、業を宗とし心を學びてしばしば三密の庭に仕へ、行を練り身を習ひて久しく五智の門に疲れる。遙かに此の法雲灌頂の位を望み、遠く彼の本覺圓明の月に歸る。重ねて事情を案ずるに、去んし承和十一年十一月十六日、檜尾大僧都、起請を申し立てられて偈く、傳法阿闍梨位、先に公家に奏し、其の勅答に隨つて之を授與さる。若し堪器の者有らば、員數に限らずと云々。近ごろ則ち香隆寺僧正、題胡（醍醐）大僧都並びに内供奉十禪師安歲等に申し聽さる。遍照寺大僧正八人の阿闍梨を申し置かるの後、當に定額僧の中、安尊、仁海、成典、尋情、先慶、賢壽等を任ず。皆專寺阿闍梨と爲す。其の外康靜大法師を五臺山阿闍梨と爲す。相壽を仁和寺觀音院の阿闍梨と爲す。残りの十一人未だ件の職位に預からず。伏して以んみるに廿一口定額僧、是れ灌頂の時の持金剛衆なり。皆祖師相傳の道具を捧げ、共に祕密傳法の壇場に向かふ。（後略）とあり、これによれば、遍照寺僧正寛朝（九一六〜九九八）は東寺定額僧の中から六人を東寺阿闍梨となし、康靜大法師（生没年未詳）を五臺山阿闍梨、相壽（生没年未詳）を仁和寺觀音院阿闍梨と爲す等、東寺以外の阿闍梨に補任している。また、『東宝記』「廿一口の内二人を眞言院有職に補任せしむ事」^⑧には、「宮中眞言院に阿闍梨二人を定め置く」と記され、東寺定額僧の阿闍梨が宮中眞言院に補任されている。

増俊と関わりのある僧侶で東寺定額僧になった勸修寺法務寛信（二〇八四〜一一五三）の事績を見ていくと、安田弘仁氏が翻刻された『勸修寺別当長吏補任等古記録』「法印權大僧都寛信」^④によると、康和五（一一〇三）年十月に勸修寺權別当に補任され、嘉承三／天仁元（一一〇八）年十月に嚴覺より灌頂を授けられ、天仁三／天永元（一一一〇）年六月に勸修寺別当を讓られている。天永四／永久元（一一一三）年中

に「東寺入寺」とあるが、これは『東寺長者補任』「太政官牒東寺 應加補定額僧拾口事」⁴²⁾によれば東寺定額僧に補任されたことがわかる。その後、永久二(一一一四)年十月に維摩会講師、永久六／元永元(一一一八)年五月に最勝会講師を勤め、保安二(一一二二)年三月に勸修寺長吏、天治三／大治元(一一二六)年五月に元興寺別当、大治四(一一二九)年十二月に律師、長承三(一一三四)年六月に三会講師の労により権少僧都、永治二／康治元(一一四二)年十二月に東寺二長者に補任され、権大僧都に転じている。そして天養二／久安元(一一四五)年十月に東寺長者に補任され、久安二(一一四六)年一月に法務を兼帯し、久安三(一一四七)年一月に東大寺別当となったことがわかる。

このように寛信は勸修寺別当になって後に東寺定額僧になりながら、保安二(一一二二)年には勸修寺長吏になっている。このように、勸修寺僧である立場を守りながら東寺定額僧になっていることが明らかなる例である。

また、横内氏が高山寺旧蔵『究竟僧網任』⁴³⁾の解題で指摘されているように、『究竟僧網任』では多くの僧侶名の右の注記に所属寺院が記されており、「東寺阿闍梨十六口」にも記されている。苦米地誠一氏⁴⁴⁾も

東寺は、実際には独立した教団組織を形成していなかったと考えられ(中略)、他寺(仁和寺や醍醐寺などの真言宗の寺社)の僧が東寺長者(東寺長者とは、空海門流としての真言宗の長者の意味である)や凡僧別当・定額僧などに補任されて東寺の法会を執行し、真言宗全体によって運営されていた。

と述べられている。このように、定額僧は他寺の僧が補任されるものであるから、増俊も東寺定額僧になったとしても小野曼茶羅寺の阿闍梨を辞めたとは考えにくい。また、小野僧正仁海(九五―一〇四六)から小野曼茶羅寺を相伝した小野僧都成尊(一〇二二―一〇七四)⁴⁵⁾は仁和寺僧であり、さらにそれを相伝した範俊は興福寺僧であつた。さらに範俊付法の厳覚は勸修寺僧であるが、その師、勸修寺僧正信覚(一

〇一一〇八四）は仁和寺僧であつて、この時代小野曼茶羅寺は仁和寺系の末寺になっていた。したがって増俊は醍醐寺系の僧侶とは言えず、あくまで仁和寺系の勸修寺僧として東寺定額僧の中の阿闍梨職十六口に補任されたのであろう。いつ阿闍梨職に補任されたか特定できないが、天永四／永久元（一一二二）年には補任されたのではないか。また、寛信と増俊は共に嚴覺付法であつてその関係は深かったことが予想される。

五・増俊を取り巻く人物

1. 鳥羽僧正範俊（一〇三八～一一二二）

範俊と増俊の關係について、柴田氏は「範俊の弟子なる事」の中で以下の点を指摘されている。

まず『野沢血脈集』⁴⁷に成尊―範俊―増俊とあることから、「範俊より直に増俊に懸けるものがある。近世の書なる故に是だけでは信憑性に疑問なしとしない」と述べられている。しかし、先に取り上げた東寺百合文書ふ函「後七日御修法修僧交名」を挙げて

天仁三（一一一〇）年に権僧正範俊が同法（後七日御修法）を修した時、「増俊阿闍梨」が伴僧として増益護摩を勤仕した事が確認できる。又た『覚禪鈔』の「如法尊勝」によれば、天仁二（一一〇九）年に範俊が同法を修した時に増俊が伴僧を勤めたと云う。⁴⁸従つて増俊は最初範俊の入室弟子であつた事も考えられる。

と述べられている。

柴田氏が指摘されるように、『野沢血脈集』のみ範俊―増俊とあり、他の血脈類には範俊からの付法は見つからない。『野沢血脈集』が近世成立であることから、多少の疑問が残る。

次に範俊勤修の「後七日御修法」に増俊が出仕したことを示す記事は、東寺百合文書以外にも『後七日御修法部類』・『御質抄』・『覚禅鈔』・『後七日』・横井清氏が翻刻された永観文庫所蔵の『御修法記』・武内孝善氏が作成された「後七日御修法交名綜覧」等に同様に見られる。

範俊が修した「如法尊勝法」で増俊が伴僧を勤めたことは、『覚禅鈔』・『如法尊勝』に「増俊阿闍梨云はく「天仁伴僧」天仁二御修法」とあることから間違いない。同様の記述は『四卷』・『秘鈔問答』にも見られる。ただし、上川通夫氏も指摘されているが、「如法尊勝法」を実際に勤修したのは『覚禅鈔』に

天仁二年八月十八日、僧正範俊鳥羽壇所に於いて之を修さる。嚴覺手替りと云々、老爛に依るか。伴僧八口。(後略)

とあるように範俊が老齡であつたためか嚴覺が手替りを勤めている。加えて、増俊と嚴覺の接触は遅くとも天仁二(一一〇九)年八月であることがわかる。また、増俊が「如法尊勝法」について意見を述べていることは、上川氏・中野玄三氏・真鍋俊照氏等で指摘されている。

これらの記事から増俊は、「如法尊勝法」が行なわれた天仁二(一一〇九)年八月以前に嚴覺と接触し、範俊(嚴覺手替わり)が導師を勤めた天仁三/天永元(一一一〇)年の「後七日御修法」に出仕している。そもそも範俊大阿の「後七日御修法」に増俊が出仕していることは、増俊と範俊の關係が密接であつたと、すなわち直接の入室の弟子であるか確認は出来ないが、その可能性を含めて少なくとも同じ寺家(末寺を含む)に所属していたことは言えるであろう。おそらく増俊が嚴覺から灌頂を受法したのは、範俊が老齡の為、早く亡くなったために直接受法は出来なかったことにより、その弟子の嚴覺より受法したと考えるのが妥当であろう。

2. 勸修寺大僧都嚴覺（一〇五六～一二二一）

柴田氏は「嚴覺より伝法灌頂を受ける事」の項で、『血脈類集記』や醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』を挙げて

永久三（一一一五）年五月二十五日、増俊は朝嚴と同壇の儀にて勸修寺勝福院に於いて嚴覺より具支灌頂を受けた。『師資血脈』には色衆六口とも云う。

と述べられ、嚴覺より灌頂を受けたとされている。

また、『御修法記』の「永久六年後七日御修法僧等交名事」⁽⁴²⁾には、嚴覺修法の後七日御修法の伴僧の一人に「増俊阿闍梨「息災護摩」」とある。そのため、「永久六（一一一八）年に権少僧都嚴覺が真言院後七日御修法を修した時、増俊阿闍梨は伴僧として息災護摩を勤仕している」と述べ、嚴覺との交流を指摘されている。これは、『後七日御修法部類』⁽⁴³⁾・『御質抄』⁽⁴⁴⁾・『覺禪鈔』⁽⁴⁵⁾「後七日」・「後七日御修法交名綜覧」⁽⁴⁶⁾でも同様の記述が確認できる。

柴田氏の挙げられた『血脈類集記』や醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』以外にも、嚴覺から増俊へ授けた伝法灌頂の記事は、横山和弘・佐藤愛弓両氏が翻刻された『真言伝法灌頂師資相承血脈』⁽⁴⁷⁾や東寺観智院金剛蔵『真言付法血脈図』⁽⁴⁸⁾・『真言附法本朝血脈』⁽⁴⁹⁾・『勸修寺別当長吏補任等古記録』⁽⁵⁰⁾に見られる。

また「随心院流系図」⁽⁵¹⁾・『東寺真言宗血脈』⁽⁵²⁾・『宝鏡鈔』⁽⁵³⁾・高山寺所蔵『血脈』⁽⁵⁴⁾（第四部第一四八函一九号六）・『真言血脈』⁽⁵⁵⁾・『密宗血脈鈔』⁽⁵⁶⁾等や坂本正仁氏が翻刻された『真言相承諸流血脈図』⁽⁵⁷⁾「秘密真言相承血脈」⁽⁵⁸⁾・「小野曼荼羅寺 随心院門跡」⁽⁵⁹⁾二、随心院所蔵「小野曼荼羅寺」随心院門跡次第⁽⁶⁰⁾（第五二函三三号）・随心院所蔵「随心院流血脈」⁽⁶¹⁾（第五二函第三五号）・随心院所蔵『真言血脈』⁽⁶²⁾（第二二函第一一七号）・随心院所蔵「随心院門跡次第」⁽⁶³⁾（第五二函三三号）・『安流伝授紀要』⁽⁶⁴⁾・随心院所蔵『安祥寺諸流一統血脈』⁽⁶⁵⁾（第

一〇六函第八二号)・随心院所蔵「(木食朝意上人所伝血脉)⁽⁸⁵⁾」(第七五函第七号)・随心院所蔵「(靈雲寺開山淨嚴和上血脉)⁽⁸⁶⁾」(第一四九函第一〇号)・『野沢血脉集』⁽⁸⁷⁾・随心院所蔵「小野広沢血脉并東寺長者醍醐座主次第」⁽⁸⁸⁾(第七五函第六号)・随心院所蔵「(野沢十二流血脉)⁽⁸⁹⁾」(第六七函第四四号)・「随心院代々正嫡血脉」⁽⁹⁰⁾・「小野曼荼羅寺 随心院門跡」⁽⁹¹⁾一から、範俊―嚴覺―増俊と繋がる法流を受法していることがわかる。

それ以外にも、『真言伝法灌頂師資相承血脉』⁽⁹²⁾・東寺觀智院金剛蔵『伝法灌頂相承略記』⁽⁹³⁾(兼意撰)・『本朝伝法灌頂師資相承血脉』⁽⁹⁴⁾・随心院所蔵『安祥寺諸流一統血脉』⁽⁹⁵⁾(第一〇六函第八二号)から、禪林寺大僧正深覺(九五五―一〇四三)―信覺―嚴覺―増俊と伝わる法流も授けられていることがわかる。

また、東寺觀智院金剛蔵『小野方血脉抄』⁽⁹⁶⁾や『血脉鈔』⁽⁹⁷⁾『小野方血脉抄』の別本)・『諸門跡譜』⁽⁹⁸⁾・『本朝高僧伝』⁽⁹⁹⁾・『伝燈広録』⁽¹⁰⁰⁾・『安流伝授紀要』⁽¹⁰¹⁾・『野沢血脉集』⁽¹⁰²⁾所収「門跡相承次第」⁽¹⁰³⁾・「安祥寺諸流一統血脉」⁽¹⁰⁴⁾の嚴覺伝に付法の弟子と記されている。このうち、『安流伝授紀要』第二十七卷所収印信の中では、「嚴覺付法中に寛信・宗意・増俊、其の嫡傳は宗意一人なり」と嚴覺の正嫡を安祥寺律師宗意としている。

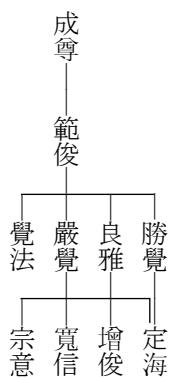
これらの記事から柴田氏の指摘を待つまでもなく、増俊は嚴覺から永久三(一一一五)年五月二十五日に勸修寺勝福院において伝法灌頂を受法している。また、永久六/元永元(一一一八)年の後七日御修法に伴僧として出仕していることが確認できる。なお、増俊が受けた法流について詳しく見ていくと、範俊―嚴覺―増俊と伝えられた伝や、信覺―嚴覺―増俊と伝えられた伝をそれぞれ受法していることがわかる。

また、上田靈城氏⁽¹⁰⁴⁾によれば、『仁王經法「祥」』⁽¹⁰⁵⁾所収「嚴覺僧都修法日記」の「仁王經法」についての解説において、「元永元年四月天下疫癘国土飢饉の災いを攘うために、嚴覺が禁中麗景殿において師の範俊の手替りとなってこの法を修した」と述べられ、そのとき増俊が「仁王經法」の法会に出仕し、十二天供を修したと記されている。

3. 少輔阿闍梨良雅（一〇二一—一〇三三）

柴田氏は、良雅からの付法について「良雅・静誉より受法する事」の中で『血脈類集記』「八通抄 太元法相承次第」に「成尊—範俊—良雅—増俊—實任」とあることから、増俊は良雅から受法したと述べられている。

柴田氏が指摘された以外にも『野沢血脈集』⁽¹⁰⁶⁾に



*該当部分の僧侶名のみを抜粋。傍注・注記等は省略した。

と記されている。他にも高山寺聖教第四部第四〇函第二五号の『太元「良雅阿闍梨」』の奥書に「已上大乗院良雅、中納言阿闍梨増俊に授ける」とあり、良雅の伝承した「太元法」を増俊に伝えたことが知られる。また、上田氏も「太元法」を良雅が増俊に伝えたことを指摘されているように、増俊は良雅から「太元法」を受法したことに間違いはないであろう。

4. 越前阿闍梨静誉（一〇七八—一一一五）

柴田氏は、静誉からの受法について『諸流灌頂秘藏鈔』「勸修寺（小野）静誉方」の「小野血脈」⁽¹⁰⁹⁾に成尊—範俊—静誉—増俊—禪然と伝わる血脈を挙げ、静誉から受法したと述べられている。また、醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』⁽¹¹⁰⁾を引用して、「静誉はまた増俊より一年遅れて永久四年四月に嚴覺より灌頂を受けていて、静誉と増俊は同法でもある」と指摘されている。

柴田氏は指摘されていないが、「小野血脈」と同様の血脈が『諸流灌頂秘藏鈔』『小野三流血脈并高野中院流血脈』にも記されている。これ以外に資料は見られない。やはり増俊は静養から受法したのであろう。

5. 小野阿闍梨蓮光房良勝（一〇七九？～一一五九？（一一六一以降か））

柴田氏の指摘は見られないが、『安流伝授紀要』⁽¹²⁾によれば

《廣澤方》

《隨心院始祖》

《大法房》

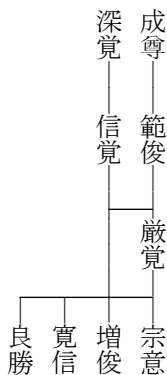
《土橋》

良雅——良勝——増俊——實任——尊實

とあり、良勝から受法している。良雅から良勝を通じて増俊に伝えられた法流は、広沢方の法流と見られる。詳しくは拙稿⁽¹³⁾で述べたが、良雅は円城寺僧正禎喜（一〇九九～一一八三）からも広沢方の法流を受法しており、良勝が良雅から受法した広沢方の法流とされる。良雅は禎喜からも広沢方の法流を受法しており、それは良勝が良雅から受法した広沢方の法流というのは、禎喜に繋がる法流でないかと思われる。良勝を通じて広沢方の法流も受法した可能性がある。

6. 勸修寺僧正信覚（二〇一～二〇八四）

信覚からの受法についても柴田氏の指摘は見られないが、隨心院所蔵『安祥寺諸流一統血脈』⁽¹⁴⁾によれば



* 該当部分の僧侶名のみを抜粋。傍注は省略した。

とあり、深覚―信覚―増俊と嚴覚を経由せずに授法されている。翻刻された大橋直義氏によれば、『安祥寺諸流一統血脈』は江戸中期の写本とされ、時代が下るため疑問が残るが、信覚からも直接に受法した可能性が考えられる。信覚は嚴覚の前の勧修寺長吏であり、広沢方の法流を相承している。名前の上から見ても嚴覚は信覚の入室の弟子であろう。増俊が嚴覚から受法していることは、その信覚からの法流を受法した可能性が考えられるし、併せて嚴覚を経ずに信覚から直接受法した可能性も否定は出来ない。他に資料は見つけられなかった。

7. 三宝院大僧正定海（一〇七四～一一四九）

師弟関係ではないが、定海との関わりも認められるかもしれない。柴田氏は「定海・寛信の後七日法伴僧を勤める事」において、東寺百合文書ふ函収載の「真言院後七日御修法請僧交名」¹⁵を挙げ、定海が後七日御修法の導師を勤めた保延二（一一三六）年・康治二（一一四三）年に増俊が伴僧を勤めたことを指摘されている。

増俊の配役について柴田氏は論じられていないが、「真言院後七日御修法請僧交名」・『御修法記』・「後七日御修法交名綜覧」¹⁶によれば、定海が導師を勤めた保延二（一一三六）年には息災護摩、康治二（一一四三）年には伴僧を勤めている。これ以外に定海と増俊との接点が認められる記事は見当たらない。

基本的に「後七日御修法」の伴僧は範俊のところでも述べたように、同じ寺家の僧が勤めるものであるが、必ずしも他寺僧が中に入らないとは限らない。定海は醍醐寺僧であり、範俊、嚴覚はそれぞれ興福寺僧、勧修寺僧という仁和寺系の僧侶である。もし定海大阿の伴僧を勤めた増俊が随心院の増俊であるならば、まさに他寺僧でありながら勤仕した可能性が推測される。

8. 勸修寺法務寛信（一〇八四～一一五三）

寛信も定海と同様師弟関係ではないが、柴田氏は増俊との関係について述べられている。その中で、寛信は後七日御修法を修法した永治二／康治元（一一四二）年・康治三／天養元（一一四四）年・天養二／久安元（一一四五）年に後七日御修法を修している。その法要に増俊が出仕したことを東寺百合文書ふ函収載の「真言院後七日御修法請僧交名」⁽¹⁸⁾を挙げて指摘され、増俊の後七日御修法出仕の傾向について

増俊と同じく長期に亘って東寺灌頂院阿闍梨であった長朝・賢円が大阿闍梨の本寺が仁和寺・醍醐寺の如何を問わず伴僧に出仕したのに対して、増俊の場合は醍醐（小野）系の大阿に限られるのが注意される。

と述べられている。

次に柴田氏は『権律師寛信授灌頂於兩人記』⁽¹⁹⁾を挙げて、寛信が天承二／長承元（一一三二）年十月十六日に安祥寺已講念範（一〇八八～一一三二）・勸修寺慈尊院開基行海（一一〇九～一一八〇）に灌頂を授けたことを取り上げられている。そして、増俊がその灌頂において持金剛衆十二人の一人を勤めたと指摘されている。

さらに柴田氏は『覚禪鈔』『仁王経』⁽²⁰⁾を挙げ、「天養二（一一四五）年五月に権大僧都法務寛信が土御門内裏昭陽舎に於て公家御祈仁王経御修法を修した時の伴僧二十口の中に「僧俊（ママ）阿闍梨」が見える」と指摘されている。

最後に柴田氏は『覚禪鈔』『如法尊勝』⁽²¹⁾を引用し、「久安三（一一四七）年十月十四日に白河金剛勝院に於て鳥羽上皇御祈に寛信法務が如法尊勝法を修した時の伴僧二十口中にも増俊阿闍梨がいた」と指摘されている。

このように柴田氏は四つの資料を挙げ、寛信と増俊の関わりについて述べられている。以下少しく見ていきたい。

後七日御修法に増俊が出仕した時の配役は、「真言院後七日御修法請僧交名」・『御修法記』⁽¹²⁾・「後七日御修法交名綜覧」⁽²⁵⁾から見るができる。これらの記事によれば、永治二／康治元（一一四二）年に伴僧、康治三／天養元（一一四四）年に増益護摩、天養二／久安元（一一四五）年に息災護摩を勤めている。

寛信が念範・行海に授けた灌頂に増俊が持金剛衆の一員として参加したことは、『権律師寛信授灌頂於兩人記』の記事から柴田氏の指摘された通りである。配役について柴田氏は述べられていないが、『権律師寛信授灌頂於兩人記』に増俊が護摩を修した記事が見られ、「請僧交名」⁽²⁵⁾にも「増俊阿闍梨〔護摩〕」とある。『血脈類集記』「寛信付法」⁽²⁶⁾に記される行海・念範に対する灌頂の記事にも、「増俊阿闍梨〔護摩〕」と記される。このことから、増俊は寛信が執り行った灌頂において護摩導師を勤めたのであろう。

また、柴田氏は灌頂が行なわれた日付について天承二／長承元（一一三二）年十月十六日とされている。『血脈類集記』「寛信付法」に記される行海・念範に対する灌頂の記事では十六日となっている。しかし、『権律師寛信授灌頂於兩人記』に「長承元年十月十六日癸卯天晴れ。明日大法師念範・行海等、共に灌頂の大道を受くべし（割書きは省略）」⁽²⁷⁾とあり、後に記された灌頂の請僧交名にも十七日とあることから、天承二／長承元（一一三二）年十月十七日であろう。『権律師寛信授灌頂於兩人記』は『真言宗全書』の解題⁽²⁸⁾によれば、寛信によって天承二／長承元（一一三二）年十月十六日に書かれたものであり、きわめて信憑性が高い。時代の下った『血脈類集記』の記事は誤記であろう。

次に『覚禅鈔』「仁王経」の記事について見ていく。寛信が天承二／長承元（一一三二）年に内裏昭陽舎にて「仁王経」を修したことは『仁王経法勤例』⁽²⁹⁾にも記されており、間違いないであろう。また『血脈鈔』⁽³⁰⁾

(野)に

天養年中に(㊤康治二年)法務(寛信)仁王經法を勤仕す。【補入㊤天養年中に如法尊勝法を勤仕す】増俊其の時伴僧たり。(後略)

* () は著者による注。

とあり、別本の東寺観智院金剛藏『小野方血脈抄』⁽³³⁾にもほぼ同様の記述がある。『大正藏』所収の『覚禪鈔』「仁王經」の請僧交名に記される「僧俊」とは、主に増上寺本を底本とする『大日本仏教全書』⁽³⁴⁾や『大正藏』が主に底本とする勸修寺本⁽³⁵⁾そのものでは「増俊」となっており、柴田氏の指摘されるように増俊の単なる誤植であろう。なお、『血脈鈔』のイ本に「康治二年」とあるのは、寛信が康治二(一一四三)年に宮中において「如法尊勝法」を修しており、その時増俊が出仕していたことから混同したためであろう。

最後に後七日御修法における寛信と増俊の関わりについて見ていくと、増俊が出仕した時の後七日御修法の導師は「醍醐(小野)系の大阿のみ」と述べられている。しかし、小野の法流を伝える安祥寺・勸修寺・随心院はこの当時すでに仁和寺の末寺となっており、信覚は仁和寺僧であり、寛信、嚴覚も同様である。小野曼茶羅寺も仁和寺僧成尊が仁海より相伝した時から仁和寺の末寺となっている。安祥寺も同様である。したがって小野三流は仁和寺系によって伝えられた小野の法流であり、醍醐寺に伝えられた醍醐三流とは異なっている。醍醐と小野を一緒にするのは間違いである。よって、範俊・嚴覚・寛信は小野仁和寺系僧であり、定海のみが醍醐寺系であるため、「醍醐(小野)系の大阿のみ」とはいえない。増俊は醍醐僧である定海の「後七日御修法」にも出仕しており、小野仁和寺系僧・醍醐僧の両方と関わりを持っていたと言えるだろう。

9. 伝授の弟子

柴田氏は「入滅と付法の事」において、先に挙げた『血脈類集記』『増俊付法』と醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』『隨心院流⁽³⁴⁾』の増俊付法に

阿闍梨増俊—顯嚴「大輔 権小僧都 左大弁宰相顯業猶—」

『仁平四—正—十九—印信を与ふ。 年卅九／嘉承二—八—十四—入—「六十八」』とあることから、増俊は大輔阿闍梨顯嚴に仁平四／嘉応元（一一六九）年一月十九日に灌頂（印信）を授与したと述べられている。

柴田氏は、それ以外にも醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』より、醍醐寺妙法院阿闍梨覺暹（生没年未詳）（重受）、仁和寺三河阿闍梨勝円（生没年未詳）、仁和寺大法師觀鏡（生没年未詳）の三人の付法の弟子がいたことを指摘されている。「覺暹（重受）」と記されたのは、覺暹の名の下割書きに「前に靜譽より受く、また宗觀より受く」とあるためであろう。

増俊の顯嚴への付法の記事は、柴田氏が挙げられた資料以外にも『血脈類集記』の「顯嚴付法⁽³⁵⁾」に

《傳十三代。増俊弟子》

權大僧都顯嚴「付法一人」

裏書 顯嚴の事

左大弁辨宰相顯業の猶子。實は助教中原廣忠の子なり。隨心院と號す。阿闍梨増俊の付法。壽永二年八月十四日卒「八十八」

とあり、付法の弟子に唐橋大僧正親嚴（一一五一—一二三六）の名が見られる。他にも顯嚴が増俊の付法の弟子と記す資料は、東寺觀智院金剛藏『真言付法血脈図⁽³⁶⁾』・『真言附法本朝血脈⁽³⁷⁾』・東寺觀智院金剛藏『小

野方血脈抄⁽³⁸⁾・『血脈鈔⁽³⁹⁾』(野)、『小野方血脈鈔』の別本)・『随心院流系図⁽⁴⁰⁾』・『随心院所藏』(『随心院流血脈』)・『随心院所藏』(『真言血脈』)・『安流伝授紀要』・『随心院所藏』(『木食朝意上人所伝血脈』)・『随心院所藏』(『靈雲寺開山浄嚴和上血脈』)・『伝燈広録』・『野沢血脈集』等に見られる。

覚暹、勝円、観鏡の名は、『随心院流系図』にも見られる。『随心院流系図』に記された覚暹の右側には、『妙法院阿闍梨醍醐重受』とあり、勝円の下割書きに「梵書也」とあつて右側に「三河阿闍梨仁和寺」とある。観鏡の下割書きには「仁和寺」と記され、醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』と相違点は見られない。ただ勝円の下割書きに「梵書也」とある意味は不明である。

それ以外にも、増俊は実任・禅然(生没年未詳)に対して授法している。

勧修寺大法房実任への授法は、詳細は拙稿に記したので省くが、『血脈類集記』の「範俊付法⁽⁴¹⁾」、『安流伝授紀要』「広沢方血脈⁽⁴²⁾」に記されており、『血脈類集記』には仁海―成尊―範俊―良雅―増俊―実任と繋がる随心院流血脈が載せられている。一方で『安流伝授紀要』では良雅―良勝―増俊―実任と繋がる良雅相伝の広沢方とされる法流を実任に授法している。

禅然への授法は、先に静誉からの受法で挙げた『諸流灌頂秘藏鈔』「小野三流血脈并高野中院流血脈⁽⁴³⁾」・『諸流灌頂秘藏鈔』「勧修寺(小野)静誉方」の「小野血脈⁽⁴⁴⁾」に、成尊―範俊―静誉―増俊―禅然と伝えられる法流が見られる。また、『密教大辞典』の随心院流血脈によれば禅然の伝える法流は随心院流の傍流とされている。

以上から、増俊は嚴覚、良雅、静誉、良勝、信覚から法を授けられ、法流授受の記事は認められないが、範俊と密接な関係を持っている。また、寛信との関係も認められる。定海との関わりも認められるかもしれない。顕嚴、実任、禅然、覚暹、勝円、観鏡に法を授けており、この中で顕嚴のみ受法の年次が判明し

ている。

六・増俊の住房について

増俊時代の随心院について当時の資料は見つかっておらず、その様子は明らかでない。上島氏は、先行研究として玉島氏の『随心院史略』と林亮勝氏の執筆された『国史大辞典』『随心院』を挙げられている。なお、二つの先行研究が典拠としている『諸門跡譜』の随心院歴代院主の記事は、「顕厳」と「親厳」の項目に間違いが見られると指摘されている。そのため、『諸門跡譜』をはじめとする随心院院主次第は近世に作成されたもので、江戸時代の歴史認識を反映した史料であり、記載内容の扱いには慎重でなければならぬ。『諸門跡譜』など後代の史料を参照しつつも、できる限り同時代史料に基づき、歴史を叙述する必要がある」と述べられている。また、上島氏は『仁和寺御日次記』、『東寺長者補任』に記された親厳の記事から「建保四（一二二六）年、随心院は朝廷の祈願所となり、阿闍梨が設置され、その後も増され、親厳の時代には随心院へ計五口の阿闍梨が置かれた」ことを指摘され、「阿闍梨の設置は、随心院での後継僧養成が公的に認められたことを意味し、それは随流が祈願所随心院を拠点として永く継承されるべき法流として公認されたことを示している」と述べられている。

また、『野沢血脈集』『第十六成尊』⁽¹³⁷⁾には、『杲寶血脈鈔』に云はく、随心院は小野曼荼羅寺の一院なり。中納言阿闍梨増俊の住坊なり。後九條の唐橋へ渡し了んぬ。親嚴僧正を唐橋の僧正と云ふは此の故なり。其の後當寺の随心院へ渡るなり」と記されている。上島氏は『野沢血脈集』に引用された『杲寶血脈鈔』に引かれた記事を挙げ、「嚴覺の資増俊は曼荼羅寺近くに住房を構え、それが随心院と呼ばれたといえよう」と指摘されている。加えて、当時の唐橋は東寺の近辺であると推定されたうえで、「後九條の唐橋へ渡した

んぬ」とされているところから、親厳が随心院そのものを九条唐橋に移転したものと理解され、「杲宝が指摘するように、随心院は増俊の住房を起源としており、親厳が東寺長者になり東寺近辺に移転したとするなら、この段階では、随心院は本尊や堂宇を有す寺院というよりは、「唐橋房」と記されるように住坊としての性格が強かったと考えられる」と述べられている。そして、親厳の時代においても「未だ独立した寺院として確立したとはいいがたい」とされている。その根拠として、一条実経（一二二三～一二八四）息で随心院門跡であった金剛王院大僧正静厳が、随心院大僧正厳家（一二七三～一三〇六）に堂宇・聖教・本尊・道具・門跡領等を譲る讓状を出すまで讓状が存在しなかったことを挙げ、静厳時代になって随心院が「独立した寺院として確立」したと述べられている。随心院が親厳の東寺長者就任にともない、唐橋へ移転したのは、寺院としての機能が不十分であったために起きたとされている。

以上のことから、「増俊・顕嚴段階では、随心院は一住房にすぎず、法流の拠点としても、また寺院としても、その実態は乏しかった」と指摘されている。

中山氏⁽⁹⁹⁾も上島氏の説を受けて、『小野曼茶羅寺略縁起⁽¹⁰⁰⁾』の「當寺第五世増俊阿闍梨、之を補す。爾れ従り以降三台槐門の尊胤を請ひ累代一山の法務を崇む。是れを随心院御門跡と稱す」を挙げた上で、「これなどは明らかに近世の寺伝認識に基づいて作成されている。増俊の住房が随心院の起源と成ったことは間違いないにしても、法流として認められ、寺領も整備されだすのが親厳の代であり、撰関家子息の入寺は静厳が初めてであることは、既に上島論によって明らかにされている。従って『略縁起』の記述は随流始祖増俊とする門跡伝類等の記事に基づくものであり、増俊の事績を強調した記述をしている」と述べられている。その上で、「随心院流系図」の増俊について「扱いが非常に寂しい」とし、親厳については「誰の目にも留まるように書かれている」と述べられている。また、『野沢血脈集』「随心院門跡相承次第⁽¹⁰¹⁾」を挙げ、『杲

宝記』からの引用として、親嚴から嚴叡までの血脉を載せており、増俊は明記されない。このことから推察するに、十四世紀段階では、随心院の始祖が増俊とは確立されていなかったのではなからうか」と指摘されている。さらに中山氏は、栄嚴（二六二—一六六四）の時代によるとされる宮内庁書陵部蔵『諸門跡次第』（F一〇—五〇）には『諸門跡譜』のように顕嚴と親嚴の事績を混同していないため注目されている。その記事には、「増俊の伝に「當門跡自是始^{云々}」と記し、親嚴の伝に「一説門跡自當代始^{云々}」と記している」とされ、そのことから、「栄嚴の代にあつても随流始祖は親嚴との説があつたことを示している」と指摘されている。

さて、『野沢血脉集』に引用された『杲宝血脉鈔』について見ていくと、随心院は増俊が小野曼茶羅寺内に住房として建てた一院家である。この記事は、親嚴が東寺の長者になるにともない親嚴自身が唐橋に移ったのであつて、随心院自体は移転していないと考えられる。そうでなければ、「其の後當寺の随心院へ渡るなり」の意味が、随心院がこの時、「當寺」すなわち曼茶羅寺内にあつたという意味する文章と矛盾するであろう。その後、増俊の付法は随心院聖教文書より、顕嚴、親嚴と相伝され、親嚴は唐橋の僧正と呼ばれた。その後親嚴は、増俊ゆかりの小野曼茶羅寺内の随心院に移った。その時点で小野曼茶羅寺内の随心院は一院家として存在していたし、その院家は増俊—顕嚴—親嚴へ相伝されたと考えられる。決して唐橋房へ随心院を移したのではなく、別個のものとするべきである。また、中山氏が指摘される『野沢血脉集』『随心院門跡相承次第』に増俊が入らないのは、「随心院門跡相承次第」と書かれた下に朱書で「法流相承各別」とあるように、門跡の問題と法流の問題は別であるからである。引用元である『血脉鈔』（東寺観智院金剛藏『小野方血脉抄』⁽⁸⁾（杲宝撰）・『血脉鈔』⁽⁹⁾（野）『小野方血脉抄』の別本）においては、「随心院流事」と題し、その後に上島氏が引用された文が記され、その後に「彼の法流と門跡相承次第と各別なり。先ず法

流相承」とあり、嚴覺—増俊—顕嚴—親嚴と繋がる法流血脈が記されている。次に「門跡相承次第」とあり、親嚴から始まる門跡相承を記されている。このように、法流相承と門跡相承を分けて書かれることからわかるように、増俊が法流初祖でないこと否定されるものではない。すなわち増俊の住房として小野曼茶羅寺内に建立された一院としての随心院は、親嚴に受け継がれても移転することはなかったであろう。なお、随心院建立以前の増俊の住房については不明である。

七. 醍醐寺八講を勤める事について

柴田氏は「醍醐寺八講の執事を勤める事」の中で、「範俊は曼茶羅寺を高野御室覚法に譲ったからその管理権は仁和寺に移ったのであるが、範俊の滅後遺弟の多くは同寺に住し続けたであろう。彼等の本寺は醍醐寺であり、増俊もそのことを証明している」と述べられている。その根拠として『下醍醐雑事記』『八講頭次第』の康治二（一一四三）年の記事を挙げられている⁽¹⁶⁴⁾。そこには「大僧供増俊「阿闍梨／白米十六石」と記されることから、「八講の大僧供を引き受けて白米十六石を負担している」と述べられている。

この八講は柴田氏によると、「十月御八講」と称して毎年十月一日より四日まで上醍醐に於て同法追善の為に催されたもので、大僧供は山上山下両所で行なわれた」とされる。また、付法の弟子である顕嚴も『下醍醐雑事記』『八講頭次第』永暦元年条に「莊嚴顯嚴「小野大甫公／白米十石紙百帖」とあることから、永暦元（一一六〇）年の「莊嚴」を担当して白米十石・紙百帖を負担した」と指摘されている。柴田氏は御八講において「八講の大僧供を引き受けて白米十六石を負担している」と述べられているが、これは負担したのではなく、出仕したことに對する供料（報酬）として白米十六石を得たと考えるのが自然ではないか。

増俊が醍醐寺で活動した資料は他に見当たらず、「増俊」とのみ記されているため、別人の可能性も否定できないが、その後に挙げられる顕嚴が「小野大甫公」と称されており、増俊の弟子顕嚴が「大輔」と称されることから、間違いないであろう。そのためこの増俊も随心院の増俊と見て間違いないだろう。だからといって他寺僧が醍醐の法会に出仕することを否定するものではなく、このことをもって醍醐の僧であると言い切るとは疑問がある。先にも書いたが、仁海から小野曼茶羅寺を相伝した成尊は仁和寺僧であり、さらにそれを相伝した範俊は興福寺僧であつた。さらに範俊付法の嚴寛は勧修寺僧であるが、その師、信寛は仁和寺僧であつて、この時代小野曼茶羅寺は仁和寺系の末寺になっていた。そこで活動した増俊や顕嚴は仁和寺の末寺である随心院と関わっていることから、増俊を醍醐寺僧とすることは躊躇される。

以上、柴田氏の論考を検討する形で増俊について述べてきた。増俊は醍醐源氏の出身で勧修寺において嚴寛から灌頂を授けられている。その後の活動を記した資料はほとんど見当たらないが、勧修寺・小野曼茶羅寺で活躍したと考えられる。嚴寛、良雅、静養、良勝、信寛より受法し、法流授受の記事は認められないが、範俊と密接な関係を持つている。また、寛信とも関わりを持ち、定海とも関わるかもしれない。東寺阿闍梨十六口の一人にも名を連ねている。増俊の父は源国俊とされるが、源俊明と考えるのが自然かもしれない。付法の弟子として顕嚴、実任、禪然、覺遍、勝円、観鏡がいたことがわかる。

今回、以下の点を新たに指摘できよう。

・増俊の生年は永保四／応徳元（一〇八四）年、没年は長寛三／永万元（一一六五）年・仁安三（一一六八）年の二説ある。没日は二月九日と二月十一日の伝承がある。入滅時の年齢は八十二歳か八十五歳とみられる。

・増俊は本寺を離れて東寺常住僧になっているわけではなく、あくまで仁和寺系の勧修寺僧として東寺定額僧に補任され、重ねて東寺阿闍梨職十六口の一人に補任されたと考えられる。

・増俊は良勝から広沢方の法流を授けられている。

・信覚から嚴覚を経由せずに、直接勧修寺に伝わる広沢方の法流を受法した可能性がある。

・付法の弟子として顕嚴、覺暹、勝円、観鏡以外に実任、禪然の名が見られる。

・醍醐寺御八講に他寺僧として出仕したと見られる。

必ずしも明確なものではないが、柴田氏の指摘に対し、いくらかの訂正と疑問点を指摘できたといえよう。

(大正大学総合仏教研究所研究員)

註

- (1) 拙稿「勧修寺大法房実任における法流授受と年譜」『智山学報』第六四輯〔二〇一五〕。
- (2) 増俊に関する先行研究として、柴田實龍「日本密教人物事典」『国書刊行会刊、二〇一〇〕「増俊」一七一頁～一七四頁がある。引用箇所はのいちいちの注記は省略する。
- (3) 『血脈類集記』第四卷、『真言宗全書』第三九卷 一〇二頁上。
- (4) 築島裕「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脈」」『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第一号〔一九七八〕 八二頁上。
- (5) 『尊卑分脈』第三篇、『新訂増補国史大系』第六〇卷上 四七三～四七六頁。
- (6) 『公卿補任』第一編、『新訂増補国史大系』第五三卷 永保二年条 二四二頁、永長二年条 三五九頁。
- (7) 『殿暦』康和三年十月十日条、『大日本古記録』『殿暦』第一卷 七六頁。
- (8) 『公卿補任』第一編、『新訂増補国史大系』第五三卷 承保二年条～永久二年条 三三四～三七九頁。
- (9) 『本朝世紀』康和元年三月十八日条、『新訂増補国史大系』第九卷 二〇三頁。
- (10) 『伝燈広録』後卷第五、『続真言宗全書』第三三卷 五二四頁上～下。

- (11) 『血脈類集記』第五卷 『真言宗全書』第三九卷 一三三頁下～一三四頁上。
- (12) 湯浅吉美 『東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』の翻刻』『成田山仏教研究所紀要』第二九号「二〇〇六」 七一頁上。
- (13) 湯浅吉美 『東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』の翻刻』『成田山仏教研究所紀要』第二九号「二〇〇六」。
- (14) 湯浅吉美 『東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』(別本)の報告』『成田山仏教研究所紀要』第三〇号「二〇〇七」。
- (15) 湯浅吉美 『東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』(又別本)の報告』『成田山仏教研究所紀要』第三一号「二〇〇八」。
- (16) 同右 二五一頁上。
- (17) 米田真理子 『随心院藏『随心院流系図』荒木浩編』平成一六年度大阪大学大学院文学研究科共同研究 研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』『大阪大学大学院文学研究科荒木浩研究室刊』二〇〇五 六一頁。この報告には書誌情報と『随心院流系図』全体の影印が掲載されている。以下の注では書名を『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』と略す。
- (18) 『諸門跡譜』 『群書類従』第五輯「系譜部」一四八頁上。小野信二氏による『諸門跡譜』の解説(『群書類題』第一卷「系譜部」六頁)によれば、「知恩院の項に尊光法親王が延宝八年(一六八〇)正月、三十六歳で死んだ記事があり、およそこの頃の作であろうと思われる」と述べられていることから、江戸時代の成立であろう。依拠した史料がはっきりしないので、信憑性についてどこまで信頼できるか不明である。
- (19) 随心院聖教類綜合調査団編『仁海僧正九百五十年御遠忌記念 随心院聖教類の研究』『汲古書院刊、一九九五』四七一頁。この報告には随心院所蔵『小野曼荼羅寺』随心院門跡次第(五二函三三三号)の巻首部分の影印と書誌情報が載せられている。
- (20) 中山一磨 『随心院別置聖教類の紹介―随心院門跡伝類を中心に―』荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開Ⅰ―講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』二〇〇六 八三頁。この報告は、随心院に収蔵される資料を調査対象としており、五つのが報告されている。そのうち『随心院代々正嫡血脈』と『小野曼荼羅寺 随心院門跡』一が翻刻され、『小野曼荼羅寺 随心院門跡』二の影印が載せられている。
- (21) 同右 八五頁。
- (22) 同右 八八頁。
- (23) 玉島實雅 『随心院史略』『随心院刊、一九三八』一三八頁。
- (24) 『尊卑分脈』第一篇 『新訂増補国史大系』第五九卷 七八頁。
- (25) 『公卿補任』第一編 『新訂増補国史大系』第五三卷 延久二年条 三三六頁。
- (26) 『真言烈祖表白集』 『統群書類従』第八輯上「伝部」三九一頁上。この記事では、増後の没日を「二月九日」としている。成立は、山田昭全氏による『真言烈祖表白集』の解説(『群書類題』第二卷「消息部・文筆部・伝部」一八七頁)によれば、末尾は親蔵の表白で終わるため、親蔵の没した嘉禎二(一二三六)年十一月以後の成立であるとし、下限は不明とされている。
- (27) 湯浅吉美 『東寺観智院金剛藏『小野方血脈抄』(梶宝撰)の調査報告と翻刻』『成田山仏教研究所紀要』第三六号「二〇一三」 八五頁。
- (28) 『血脈鈔』(野) 『続真言宗全書』第二五卷 九二頁上。
- (29) 『諸流灌頂秘藏鈔』 『真言宗全書』第二七卷 三四一頁上。

- (30) 『秘密儀軌随聞記』第一卷 『真言宗全書』第一卷 一三頁下。
 - (31) 『野沢血脈集』第二卷 『真言宗全書』第三九卷 四〇〇頁上。
 - (32) 米田真理子「随心院藏『随心院流系図』」荒木浩編『小野随心院所蔵の密教文獻・圖像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその探求』『大阪大学大学院文学研究科荒木浩研究室刊、二〇〇五』 五九頁。
 - (33) 上島幸「随心院と随流の確立」荒木浩編『平成一六年度大阪大学大学院文学研究科共同研究 研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文獻・圖像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその探求』『大阪大学大学院文学研究科荒木浩研究室刊、二〇〇五』 二〇頁。
 - (34) 中山一鷹「随心院別置聖教類の紹介―随心院門跡伝類を中心に―」荒木浩編『小野随心院所蔵の文獻・圖像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその展開Ⅰ―講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』二〇〇六 七九頁。
 - (35) 『真言列祖表白集』『統群書類従』第八輯上「伝部」 三九一頁上。
 - (36) 東寺百合文書ふ函第二分冊二号一「後七日御修法修僧交名」。
 - (37) 『東寺長者補任』第三卷 『統々群書類従』第二輯「史伝部」 五八一頁下。
 - (38) 横内裕人「史料紹介 高山寺旧藏『究竟僧綱任』」一解題および影印・翻刻―『南都仏教』第八〇号「二〇〇二」 一三二頁。
 - (39) 『東宝記』第七卷 『統々群書類従』第二輯「宗教部」 一四三頁下〜一四四頁上。
 - (40) 同右 一四四頁下。
 - (41) 安田弘仁「翻刻『勸修寺別当長吏補任等古記録』上『勸修寺論輯』第二号「二〇〇五」 七五〜七七頁。
 - (42) 『東寺長者補任』第二卷 『統々群書類従』第二輯「史伝部」 五三四頁下。
 - (43) 横内裕人「史料紹介 高山寺旧藏『究竟僧綱任』」一解題および影印・翻刻―『南都仏教』第八〇号「二〇〇二」 一〇八〜一〇九頁。
 - (44) 吉米地誠一「興教大師覚鑑聖人年譜」上巻『フンブル社刊、二〇〇二』 二頁。
 - (45) 成尊が仁和寺僧とされることについては、吉米地誠一「平安期真言密教の研究 第二部 平安期の真言密教と密教浄土教」『フンブル社刊、二〇〇八』第二篇第一章「成尊作『観心月輪記』について―紹介・翻刻と作者成尊―」に詳しい。
 - (46) 範俊が興福寺僧とされることについては、同じく吉米地誠一「平安期真言密教の研究 第二部 平安期の真言密教と密教浄土教」第二篇第二章「実範の阿弥陀観 付・東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻」に詳しい。
 - (47) 『野沢血脈集』第一卷 『真言宗全書』第三九卷 二五一頁上。
 - (48) 『覚禪鈔』第一五巻「如法尊勝」 『大正蔵』「佛像部」第四巻 五五〇頁下、五六一頁上。
- 『覚禪鈔』「如法尊勝」は、勸修寺本を中心に編纂した『大正蔵』の他に増上寺本『大日本仏教全書』第四五巻「覚禪鈔 第一」・万徳寺本『仏教美術研究上野記念財団助成研究会研究報告書 図像蒐成Ⅱ『覚禪鈔』第一「仏教美術研究上野記念財団助成研究会刊、一九九四」・真福寺本（上川通夫）『覚禪鈔』「如法尊勝法」解題『平成一五年度〜平成一八年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書 中世寺院の知的体系の研究―真福寺および勸修寺聖教の復元的研究―』二〇〇七、国文学研究資料館編『中世先徳著作集』『真福寺善本叢刊』第二期第三巻（仏法部）六「臨川書店刊、二〇〇六」等がある。これらにおいて増俊に関する記述はほぼ同じである。本論文では『大正蔵』から引用する。これらの写本に関する先行研究として、中野玄三『覚禪鈔』の伝播と『勸修寺本』の成立』覚禪鈔研究会編『覚禪鈔の研究』『親王院堯栄文庫刊、二〇〇四』、上川通夫『日本中世仏教と東アジア世界』『塙書房刊、二〇一〇』

- (二) 第Ⅱ部第二章「真福寺本『覺禪鈔』」「如法尊勝法」等がある。
- (49) 『後七日御修法部類』 『統群書類従』第二五輯下「釈家部」一一一七頁下。
- (50) 『御實抄』末 『統群書類従』第二五輯下「釈家部」一〇二頁上。
- (51) 『覺禪鈔』第一三三卷「後七日」中卷 『大正藏』「圖像部」第五卷 六六三頁上、六六八頁中。
- (52) 横井清「永観文庫所蔵『御修法記』」『立命館文学』第二一〇号「一九六二」 四五頁上。
- (53) 武内孝善「後七日御修法交名綜覧」一「高野山大学論叢」第二卷「一九八六」 九七頁。
- (54) 『覺禪鈔』第一五卷「如法尊勝」 『大正藏』「圖像部」第四卷 五六一頁上。
- (55) 『四卷』第二卷 『大正藏』第七八卷 七九七頁上。
- (56) 『秘鈔問答』第一卷 『大正藏』第七九卷 三三七頁上。
- (57) 上川通夫『日本中世仏教と東アジア世界』(『塙書房刊』、二〇一二) 第Ⅱ部第三章「如法尊勝法聖教の生成」。
- (58) 『覺禪鈔』第一五卷「如法尊勝」 『大正藏』「圖像部」第四卷 五四七頁下。
- (59) 中野玄三「続々日本仏教美術史研究」『思文閣出版刊』、二〇〇八 仏像・仏画篇三「真福寺本『覺禪鈔』」「如法尊勝法」について。
- (60) 真鍋俊照「密教図像と儀軌の研究」下巻「法蔵館刊」、二〇〇二「尊勝法本尊の諸問題」。
- (61) 後七日御修法に出仕する大阿と伴僧との関係について苦米地誠一氏は『平安期真言密教の研究 第二部 平安期の真言密教と密教浄土教』第二篇第二章「実範の阿弥陀観 付・東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻」(二七七頁) 中で、「此の当時の御修法全般では、伴僧は大阿の寺家から選ばれるなど、大阿との関係が緊密なようである。後七日御修法の場合は他寺からの諸僧もある」と述べられている。
- (62) 横井清「永観文庫所蔵『御修法記』」『立命館文学』第二一〇号「一九六二」 四八頁下。
- (63) 『後七日御修法部類』 『統群書類従』第二五輯下「釈家部」一一一七頁上。
- (64) 『御實抄』末 『統群書類従』第二五輯下「釈家部」一〇三頁下。
- (65) 『覺禪鈔』第一三三卷「後七日」中卷 『大正藏』「圖像部」第五卷 六六九頁上。
- (66) 武内孝善「後七日御修法交名綜覧」一「高野山大学論叢」第二卷 九七頁。
- (67) 横山和弘・佐藤愛弓「真言伝法灌頂師資相承血脈」翻刻・索引「名古屋大学比較人文学研究年報 二〇〇三年 仁和寺資料 第四集」
- (68) 【記録編】真言伝法灌頂師資相承血脈「名古屋大学文学研究科・比較人文学研究室刊、二〇〇四」 二四頁下。
- (69) 湯浅吉美「東寺観智院金剛蔵『真言付法血脈図』の翻刻」『成田山仏教研究所紀要』第二九号「二〇〇六」 七一頁上。
- (70) 『真言附法本朝血脈』 『統真言宗全書』第二五卷 一二頁上。
- (71) 安田弘仁「翻刻『勧修寺別当長吏補任等古記録』上」『勧修寺論輯』第二号「二〇〇五」 七四頁。
- (72) 米田真理子「随心院蔵『随心院流系図』」荒木浩編『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその探求』
- 〔大阪大学大学院文学研究科荒木浩研究室刊、二〇〇五〕 六一頁。
- 〔東寺真言宗血脈〕 『統真言宗全書』第二五卷 一〇七頁上・一〇九頁下。坂本正仁氏が翻刻された願成寺本にも同様の記述が見られる(『東密血脈譜叢刊』一 東寺真言宗血脈『豊山学報』第三二号「一九八六」 二九頁下・三一頁下)。

- (73) 『宝鏡鈔』 『大正藏』第七七卷 八四八頁中。
- (74) 高山寺藏『血脈』 高山寺典籍文書綜合調査団編『明恵上人資料』第二(高山寺資料叢書第七冊)〔東京大学出版会刊、一九七八〕「明恵上人関係血脈集」所収 一一三頁。
- (75) 『真言血脈』 『続群書類従』第二八輯下「釈家部」 三二〇頁下。
- (76) 『密宗血脈鈔』下巻『続真言宗全書』第二五巻 三六〇頁下。
- (77) 坂本正仁「東密血脈譜叢刊二 真言相承諸流血脈刊」『豊山学报』第四〇号「一九九七」 五四頁。
- (78) 中山一麿「随心院別置聖教類の紹介―随心院門跡伝類を中心に―」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその展開Ⅰ―講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』二〇〇六 八八頁。
- (79) 随心院聖教類綜合調査団編『仁海僧正九百五十年御遠忌記念 随心院聖教類の研究』〔汲古書院刊、一九九五〕 四七一頁。
- (80) 大橋直義『転形期の歴史叙述―縁起、巡礼、その空間と物語―』『資料篇』六「小野随心院蔵血脈類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕 七二六頁。随心院聖教類綜合調査団編『仁海僧正九百五十年御遠忌記念 随心院聖教類の研究』〔汲古書院刊、一九九五〕 この報告の四七二頁に影印が載せられている。
- (81) 大橋氏は本文で扱う以下の随心院所蔵血脈を翻刻・紹介されている。「随心院流血脈」(第五二函第三五号)、『真言血脈』(第二二函一一七号)、『小野広沢血脈并東寺長者醍醐座主次第』(第七五函第六号)、『安祥寺諸流一統血脈』(第一〇六函第八二号)、『木食朝意上人所伝血脈』(第七五函第七号)、『靈雲寺開山淨嚴和上血脈』(第一四九函第一〇号)、『野沢十二流血脈』(第六七函第四四号)。
- (82) 同右 七一頁。
- (83) 随心院聖教類綜合調査団編『仁海僧正九百五十年御遠忌記念 随心院聖教類の研究』〔汲古書院刊、一九九五〕 四七〇頁に増俊の名が記された巻首部分の影印が載せられている。
- (84) 『安流伝授紀要』第二巻『真言宗全書』第三四巻 四五〇頁下。
- (85) 大橋直義『転形期の歴史叙述―縁起、巡礼、その空間と物語―』『資料篇』六「小野随心院蔵血脈類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕 七二七頁。
- (86) 同右七三一頁。
- (87) 同右七三四頁。
- (88) 『野沢血脈集』第一巻『真言宗全書』第三九巻 三五二頁下・三五四頁上、同第二巻『真言宗全書』三九巻 三九七頁上・三九八頁下。
- (89) 大橋直義『転形期の歴史叙述―縁起、巡礼、その空間と物語―』『資料篇』六「小野随心院蔵血脈類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕 七一九頁下、随心院聖教類綜合調査団編『仁海僧正九百五十年御遠忌記念 随心院聖教類の研究』〔汲古書院刊、一九九五〕 四七〇頁に増俊の名が記された巻中途部分と巻末の影印が載せられている。
- (90) 大橋直義『転形期の歴史叙述―縁起、巡礼、その空間と物語―』『資料篇』六「小野随心院蔵血脈類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕 七三三頁。
- 中山一麿「随心院別置聖教類の紹介―随心院門跡伝類を中心に―」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相關的・

総合的研究とその展開Ⅰ―講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』二〇〇六 八三頁。

(91) 同右 八五頁。

(92) 横山和弘・佐藤愛弓『真言仏法灌頂師資相承血脈』翻刻・索引『名古屋大学比較人文学研究年報 二〇〇三年 仁和寺資料 第四集』記録編』真言仏法灌頂師資相承血脈』名古屋大学文学研究科・比較人文学研究室刊、二〇〇四 一九頁上、二四頁下。

(93) 湯浅吉美『東寺観智院金剛藏』『仏法灌頂相承略記』(兼意撰)の翻刻(その二)『成田山仏教研究所紀要』第三四号「二〇一」 一〇四頁。

(94) 『本朝仏法灌頂師資相承血脈』『大日本古文書』家わけ第一九ノ一「醍醐寺文書之一」第二七九号 三七四頁。

(95) 大橋直義『転形期の歴史叙述―縁起、巡礼、その空間と物語―』『資料篇』六「小野随心院藏血脈類、解題・翻刻」『慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇』 七七頁。

(96) 湯浅吉美『東寺観智院金剛藏』『小野方血脈抄』(梶玉撰)の調査報告と翻刻『成田山仏教研究所紀要』第三六号「二〇一三」 八二頁、八五頁。

(97) 『血脈鈔』野『続真言宗全書』第二五巻 九一頁上、九二頁上。

(98) 『諸門跡譜』『群書類従』第五輯「系譜部」 一四八頁上。

(99) 『本朝高僧伝』第五巻『大日本仏教全書』第一〇三巻「本朝高僧伝」第二 二二四頁上。

(100) 『伝燈広録』後巻第一『続真言宗全書』第三三巻 四九三頁上。

(101) 『安流伝授紀要』第一九巻『真言宗全書』第三五巻 九六頁下、同二七巻『真言宗全書』第三五巻 二〇一頁下。

(102) 『野沢血脈集』第一巻『真言宗全書』第三九巻 四〇一頁下。

(103) 『野沢血脈集』第二巻『真言宗全書』第三九巻 三九七頁上。

(104) 上田霊城『改訂真言密教事相概説』諸尊法・灌頂部』下巻『同朋社メディアプラン刊、二〇〇八』 五四頁。

(105) 『血脈類集記』第四巻『真言宗全書』第三九巻 三九七頁上。

(106) 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録』第二「東京大学出版会刊 一九七五」 四部四〇箱二五号(三三二頁)には、

資料名として『太元 大日 釋迦 弥勒所變云々』と挙げているが、本論では外題にある『太元「良雅阿闍梨」』を資料名として取った。

また、四部五三箱三三三三三三(四一五頁)・五〇六号(四二八頁)、『高山寺経蔵典籍文書目録』第三「東京大学出版会刊 一九七九」四部

八九箱一九号「二二二」(三九〇頁)にも同様の記録を見る事ができる。

(107) 上田霊城『改訂真言密教事相概説』諸尊法・灌頂部』下巻『同朋社メディアプラン刊、二〇〇八』 一〇九頁。

(108) 『諸流灌頂秘蔵鈔』『真言宗全書』第二七巻 三四五頁下。

(109) 築島裕『醍醐寺蔵本「仏法灌頂師資相承血脈」』『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第一号「一九七八」 八二頁上。

(110) 『諸流灌頂秘蔵鈔』『真言宗全書』第二七巻 三四一頁上。

(111) 『安流伝授紀要』第一〇巻『真言宗全書』第三四巻 四三七頁下。

(112) 拙稿『勸修寺大法房実任における法流授受と年譜』『智山学報』第六四輯「二〇一五」。

- (114) 大橋直義『軀形期の歴史叙述—縁起、巡礼、その空間と物語—』『資料篇』六「小野随心院藏血脈類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕七二頁。
 (115) 東寺百合文書函第二分冊二四「真言院後七日御修法請僧交名」、同第一分冊二〇三二「真言院後七日御修法請僧交名」。
 (116) 横井清「永観文庫所藏『御修法記』」「立命館文学」第二一〇号「一九六二」五六頁上、六〇頁下。
 (117) 武内孝善「後七日御修法交名綜覧」一「高野山大学論叢」第二二卷「一九八六」九九頁。
 (118) 東寺百合文書函第二分冊二〇三〇「真言院後七日御修法請僧交名」、同第二分冊二〇三一「真言院後七日御修法請僧交名」、同第二分冊二〇三三「真言院後七日御修法請僧交名」。
 (119) 『権律師寛信授灌頂於兩人記』、『真言宗全書』第二七卷 九七頁上。
 (120) 『寛禪鈔』第二七卷「仁王經」下卷『大正藏』『図像部』第四卷 六九七頁中。
 (121) 『寛禪鈔』第五卷「如法尊勝」『大正藏』『図像部』第四卷 五五四頁上。
 (122) 柴田氏は指摘されていないが、『伝燈広録』によると寛信は康治二（一一四三）年にも宮中において「如法尊勝法」を修しており、そのとき増俊も出仕した記事が見られる（『伝燈広録』後卷第二「寛信伝」『続真言宗全書』第三三卷 五〇一頁上）。
 (123) 横井清「永観文庫所藏『御修法記』」「立命館文学」第二一〇号「一九六二」六〇頁上、六一頁上、六二頁上。
 (124) 武内孝善「後七日御修法交名綜覧」一「高野山大学論叢」第二二卷「一九八六」九九頁。
 (125) 『権律師寛信授灌頂於兩人記』、『真言宗全書』第二七卷 九八頁上。
 (126) 同右 一〇一頁下。
 (127) 『血脈類集記』第五卷『真言宗全書』第三九卷 一一九頁上。
 (128) 『権律師寛信授灌頂於兩人記』、『真言宗全書』第二七卷 九五頁下。
 (129) 『真言宗全書』解題 一九四頁上。
 (130) 『仁王經法勤例』、『続群書類従』第二二六輯上巻「釈家部」 一三〇頁下。
 (131) 『血脈鈔』野「続真言宗全書」第二五巻 九一頁上。
 (132) 湯浅吉美「東寺観智院金剛藏『小野方血脈抄』」〔杲玉撰〕の調査報告と翻刻『成田山仏教研究所紀要』第三六号「二〇一三」 八二頁。
 (133) 『寛禪鈔』「仁王經」下巻『大日本仏教全書』第四六巻「寛禪鈔」第二一一三五頁上。
 (134) 『寛禪鈔』「仁王經法」 寛禪鈔研究会編『勸修寺善本影印集成4 寛禪鈔』第四 三二七頁。
 (135) 築島裕「醍醐寺蔵本『仏法灌頂師資相承血脈』」「醍醐寺文化財研究所研究紀要」第一号「一九七八」 一〇三頁。
 (136) 『血脈類集記』第六巻『真言宗全書』第三九巻 一五九頁下。
 (137) 湯浅吉美「東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』」の翻刻『成田山仏教研究所紀要』第二九号「二〇〇六」 七一頁上。
 (138) 『真言付法本朝血脈』、『続真言宗全書』第二五巻 一一頁上。
 (139) 湯浅吉美「東寺観智院金剛藏『小野方血脈抄』」〔杲玉撰〕の調査報告と翻刻『成田山仏教研究所紀要』第三六号「二〇一三」 八五頁。
 (140) 『血脈鈔』野「続真言宗全書」第二五巻 九二頁上。
 (141) 米田真理子「随心院藏『随心院流系図』」荒木浩編『小野随心院所蔵の密教文獻・図像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその探求』

- (141) 〔大阪大学大学院文学研究科荒木浩研究室刊、二〇〇五〕 六一頁。
大橋直義『転形期の歴史叙述—縁起 巡礼、その空間と物語—』〔資料篇〕六「小野随心院藏血脉類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕 七二六頁。
- (142) 同右 七二一頁。
- (143) 『安流伝授紀要』第一九卷 『真言宗全書』第三五卷 九六頁下。
- (144) 大橋直義『転形期の歴史叙述—縁起 巡礼、その空間と物語—』〔資料篇〕六「小野随心院藏血脉類、解題・翻刻」〔慶応義塾大学出版会刊、二〇一〇〕 七二一頁。
- (145) 同右 七三四頁。
- (146) 『伝燈広録』後巻第五 『続真言宗全書』第三三卷 五二四頁下。
- (147) 『野沢血脉集』第二卷 『真言宗全書』第三九卷 四〇〇頁上。
- (148) 拙稿『勧修寺大法房実任における法流授受と年譜』『智山学报』第六四輯〔二〇一五〕。
- (149) 『血脉類集記』第四卷 『真言宗全書』第三九卷 九三頁下。
- (150) 『安流伝授紀要』第一〇卷 『真言宗全書』第三四卷 四三七頁下。
- (151) 『諸流灌頂秘藏鈔』第一〇卷 『真言宗全書』第二七卷 三四一頁上。
- (152) 『諸流灌頂秘藏鈔』 『真言宗全書』第二七卷 三四五頁下。
- (153) 上島享「随心院と随流の確立」荒木浩編『平成一六年度大阪大学大学院文学研究科共同研究 研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその探求』〔大阪大学大学院文学研究科荒木浩研究室刊、二〇〇五〕。
- (154) 『諸門跡譜』『群書類従』第五輯「系譜部」一四八頁上〜下。
- (155) 『仁和寺御日次記』『続群書類従』第二九輯下「雑部」三三六頁下、三四二頁下。
- (156) 『東寺長者補任』第二卷 『続々群書類従』第二輯「史伝部」五七六頁上、五七七頁上、五八三頁下。
- (157) 『野沢血脉集』第一卷 『真言宗全書』第三九卷 三五四頁上。
- (158) 「大僧正静嚴附属状」『大日本古文書』家わけ一九ノ二「醍醐寺文書之二」第三五七号 一七七〜一七八頁。
- (159) 中山一磨「随心院別置聖教類の紹介—随心院門跡伝類を中心に—」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相關的・総合的研究とその展開—講演録—随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』〔二〇〇六〕。
- (160) 玉島實雅「随心院史略」所収『小野曼荼羅寺略縁起』〔随心院刊、一九三八〕 一一頁。
- (161) 『野沢血脉集』第二卷 『真言宗全書』第三九卷 四〇七頁上。
- (162) 湯浅吉美「東寺観智院金剛蔵『小野方血脉抄』(杲宝撰)の調査報告と翻刻」『成田山仏教研究所紀要』第三六号〔二〇一三〕 八五頁。
- (163) 『血脉鈔』野 『続真言宗全書』第二五卷 九二頁上〜下。
- (164) 『下醍醐雜事記』第六卷「八講頭次第」 中山俊司編『醍醐雜事記』〔醍醐寺刊、一九三一〕 一七五頁。
- (165) 同右 一七八頁。